

リチャード・ヒル教授を偲ぶ

栗田 禎子

スーダン近代史研究に大きな足跡を残したリチャード・レスリー・ヒル教授 Richard Leslie Hill が1996年3月21日、オックスフォードで死去した。

リチャード・ヒルは1901年、スコットランド系の家庭に生まれた。幼少時は両親が移住したニュージーランドで過ごしたが、大学教育はオックスフォードで受け、卒業後の1927年、当時イギリス支配下にあったスーダンに、当初は鉄道省勤務の役人として赴任した。勤務のあいまのスーダン史研究がやがて専門家の域に達し、教育省に転じ、ゴードン・メモリアル・カレッジ（現在のハルトゥーム大学）の歴史学の教官を務める。1949年に退官・帰国した後は、ダラム大学教授として中東史を教え、1966年に同大を退いた後もアメリカ、カナダ、ナイジェリア等の諸大学で教鞭をとった。

リチャード・ヒルは、オスマン帝国エジプト総督ムハンマド・アリー一家の政権によるスーダン支配（1820～85年、いわゆる「トルコ支配期」）の歴史について実証的研究をおこなった、欧米ではほとんど最初の人物である。スーダン赴任前後から意識的にアラビア語・オスマン語の習得に努めたヒルは、やがてハルトゥームのみならずカイロ、イスタンブールの文書館でも精力的に調査をおこなって、ムハンマド・アリー政権の支配が行政・軍事・産業等の諸分野でスーダン社会にいかほど大きな影響を与えたかを明らかにし、いわば近代「スーダン」の成立過程自体を描出した。19世紀スーダン行政史を扱った著作として、ヒルの『スーダンにおけるエジプト』（1959年）を凌ぐものは現在に至るまで現われていない。スーダン近代史についてのきわめて具体的で正確な認識

の背後には、植民地行政官としての実体験の厚みが窺われる。『スーダン人名辞典』（1967年。初版は1951年の『英・エジプト領スーダン人名辞典』）には、スーダン史上重要な役割を果たした人物1900人以上についての情報が収められているが、それはアラビア語・ヨーロッパ諸語の文献を広く渉猟するに加えて、スーダン各地を足で歩き、あるいは個々のスーダン人の家族に問い合わせの手紙を送って集められたものであった。近年の欧米のスーダン研究者の中にアラビア語やオスマン語を使いこなせる人が必ずしも多くないこと、また、抽象的・一般的議論が先行しがちで、歴史的事実を踏まえた実証研究がなおざりにされがちであることを考えると、ヒルの業績は傑出している。

ルネサンス美術専攻のイタリアの女性と結婚し、幸福な結婚生活を送ったが1988年に死別。晩年はオックスフォードで一人暮らしをしていたが、最後の瞬間まで研究（最後のテーマは1860年代にスーダンからメキシコに派遣された「黒人大隊」の歴史）を続けていた。筆者は1993、94年に自宅を訪れたが、90代半ばのヒルが依然アラビア語の史料を使いこなして著述を続け、質問に的確に答えてくれるのに畏怖を感じた。蔵書の大半は整理してしまっていたが、書棚には厳選された二、三十冊の本と、青年時代以来スーダンでつけ続けた日記を製本したものなどが並んでいた。現在のスーダンの情勢をもフォローしており、「拳国イスラム戦線はスーダンにとって、ムハンマド・アリ政権やイギリス支配がそうであったようにforeign（外来的、異質）なものだ」と語っていたのが—この言葉もさまざまに解釈できようが—印象的である。冥福を祈りたい。

（くりた よしこ 千葉大学）